

本渡市文化財調査報告 第4集

本渡市の古墳 (1)

〔大松道古墳 金左衛門鬼塚古墳 鬼の鼻古墳〕
〔観音向山1号墳 須森古墳 楠浦新田古墳〕

1984

本渡市教育委員会

序 文

今日まで、天草島内に所在する埋蔵文化財に関する考古学的調査は、他地域に比べると非常に少ないといえます。これは狭い島内で、遺跡を破壊するほどの開発が少なかったことと、行政のうえでは、専門職員の不足から遺跡調査もままならず、文化財保護行政が十分でなかったこともあります。しかしながら、数多くの遺跡の存在が先学諸氏の論考によって知られており、今後はこれらを基に文化財についての関心を高めることが必要であると思います。

本市においては、昭和56年4月に「歴史民俗資料館」が開館し、文化財の調査研究の役割等を果たしつつあります。今回、本渡市内に所在する古墳の現状確認実測調査にあたり、指導・助言を賜りました諸先生方、酷暑の中にあって調査にご協力くださった方々に対し深く感謝致します。又、その成果をまとめ、報告書を刊行するにあたっては、貴重な資料の提供・寄稿等、関係各位に御高配をいただき誠にありがたく厚くお礼申し上げます。

これを契機として、より充実した文化財保護行政を行うよう努力してまいりたいと思います。この報告書が埋蔵文化財に対する認識と理解、さらに学術・研究上の一助となれば幸いです。

昭和59年3月

本渡市教育委員会

教育長 浦 上 恒 雄

例 言

1. 本報告書は、熊本県本渡市に所在する古墳の現状確認実測調査報告書である。
2. 大松道古墳、金左衛門鬼塚古墳、鬼の鼻古墳、観音向山1号墳の調査は、昭和56年度熊本大学法文学部史学科卒業論文資料として松尾法博、古城史雄両氏が行い報告されたものである。
3. 須森古墳の調査は昭和56年度、本渡市教育委員会が行い、歴史民俗資料館学芸員平田豊弘が報告したものである。
4. 楠浦新田古墳の調査は昭和55年度、国学院大学文学部考古学研究室助手、池田栄史氏が行い報告されたものである。
5. 本報告書に使用した図は、各調査担当者が作成した。写真は平田が撮影した。
6. 本報告書の編集は平田が担当した。

目 次

第1章 総 論	平田豊弘	5
1. はじめに		5
2. 調査について		5
第2章 大松道古墳	松尾法博 古城史雄 平田豊弘	7
1. 位置と環境		7
2. 古墳の現状		7
3. 石室の構造		7
4. 遺 物		8
5. まとめ		11
第3章 金左衛門鬼塚古墳	松尾法博 古城史雄 平田豊弘	12
1. 位置と環境		12
2. 古墳の現状		12
3. 石室の構造		12
4. 遺 物		15
5. まとめ		15
第4章 鬼の鼻古墳	松尾法博 古城史雄 平田豊弘	16
1. 位置と環境		16
2. 古墳の現状		16
3. 石室の構造		16
4. 遺 物		16
5. まとめ		16
第5章 観音向山1号墳	松尾法博 古城史雄 平田豊弘	19
1. 位置と環境		19
2. 古墳の現状		19
3. 石室の構造		19
4. 遺 物		20
5. まとめ		20
第6章 須森古墳	平田豊弘	23
1. 位置と環境		23
2. 古墳の現状		23
3. 石室の構造		24
4. 遺 物		27
5. まとめ		27
第7章 楠浦新田古墳	池田栄史	29
1. 位置と環境		29
2. 古墳の現状		29
3. 石室の構造		29
4. 遺 物		30
5. まとめ		30
第8章 本渡市の古墳文化	池田栄史	33

挿 図 目 次

- 第1図 本渡市における古墳・墳墓分布図
- 第2図 大松道古墳表面採集遺物実測図
- 第3図 大松道古墳石室実測図
- 第4図 金左衛門鬼塚古墳石室実測図
- 第5図 鬼の鼻古墳石室実測図
- 第6図 観音向山1号墳表面採集遺物実測図
- 第7図 観音向山1号墳石室実測図
- 第8図 須森古墳周辺地形図
- 第9図 須森古墳墳丘断面図
- 第10図 須森古墳試掘構配置図
- 第11図 須森古墳墳丘基部試掘構実測図
- 第12図 須森古墳玄室内奥壁北部試掘構実測図
- 第13図 須森古墳石室実測図
- 第14図 須森古墳表面採集遺物実測図
- 第15図 楠浦新田古墳表面採取遺物実測図
- 第16図 楠浦新田古墳石室実測図

図 版 目 次

- 図版1 大松道古墳現状（羨道側から）
- 図版2 大松道古墳表面採集遺物
- 図版3 金左衛門鬼塚古墳現状（羨道側から）
- 図版4 金左衛門鬼塚古墳羨道（羨道側から）（玄室側から）
- 図版5 鬼の鼻古墳・観音向山1号墳遠景（対岸下浦町須森より臨む）
- 図版6 鬼の鼻古墳現状（羨道側から）
- 図版7 観音向山1号墳現状（羨道側から）
- 図版8 観音向山1号墳表面採集遺物
- 図版9 金左衛門鬼塚古墳・須森古墳遠景（本渡市十万山より臨む）
- 図版10 須森古墳現状（羨道側から）（後方から）
- 図版11 須森古墳表面採集遺物
- 図版12 楠浦新田古墳遠景
- 図版13 楠浦新田古墳現状（羨道側から）
- 図版14 楠浦新田古墳表面採集遺物



1. 大松道古墳(円墳, 横穴式石室)須恵器, 土師器
2. 湯貫新田古墳(円墳, 横穴式石室)玄室天井部, 西側壁欠落
3. 須森古墳(円墳, 横穴式石室)須恵器
4. 先尾串石棺群(箱式石棺, 9基)基数・現状未確認
5. 金左衛門鬼塚古墳(円墳, 横穴式石室)玄室天井部, 奥壁欠損
6. 先明瀬鬼塚古墳(不明)須恵器, 現状未確認
7. 茂木根横穴群 明瀬横穴 1基(不明)未確認
江古平横穴 4基(2基改造)須恵器
善坪横穴 3基(不明)未確認
8. 大矢崎古墳群 1号墳
2号墳 (横穴式石室, 既破壊3基(?)) 現状未確認
3号墳
4号墳
9. 妻の鼻墳墓群(地下式板石積石室群, 36基)本渡市文化財調査報告第1集
10. 楠浦新田古墳(円墳, 横穴式石室)須恵器, 小玉「肥後考古」第2号
11. 鬼の鼻古墳(円墳, 横穴式石室)須恵器
12. 南古郷古墳(不明)既破壊, 石材残存
13. 観音向山1号墳(円墳, 横穴式石室)
観音向山2号墳(不明)既破壊

第1図 本渡市における古墳・墳墓分布図

注 分布図については,文化庁発行『全国遺跡地図』(熊本県)から抽出し補充した。今後の確認,検討を要する古墳も多く存在する。

第1章 総論

1. はじめに

天草の島々は、大きく大矢野島、御所浦島、上島、下島と区分され、さらに周辺に点在する大小120余りの島からなる。北東は三角瀬戸を隔てて宇土半島と、北は早崎海峡を隔てて島原半島と、南東は長島海峡を隔てて鹿児島県の長島や獅子島とそれぞれ接する。これらの島々の海岸線は、海進・海退、隆起・沈降等により出入りの激しいリアス式海岸で、険しい丘陵が海岸までのび、平地は極めて少ない。このため集落は、河川や谷間によって開けたわずかな土地に分散している。

天草の古墳、並びに古墳時代の墳墓については多くの先学による調査・研究が行われ200基余りの存在が知られているが、これらのほとんどは海に面した丘陵端部に立地する。その分布状態を見ると大半が大矢野島、維和島、永浦島等を中心とする三角半島と上島の間に所在する島々及びその周辺地域に集中している。他に本渡市を中心にその周辺である上島と下島の接点地域、御所浦島とその対岸である上島南部地域にある程度の集中がみられる。下島の五和町、荅北町、河浦町等には1～数基が散在するにすぎない。これらの古墳の中で墳丘や石室、出土遺物の実測等が行われたものは大変少なく、今後の調査が待たれている。

2. 調査について（第1図）

本渡市では教育委員会文化係、歴史民俗資料館の文化財調査活動として市内に所在する古墳の現状確認を行い、今後の保護活動の基礎資料として、又、古墳時代の様相を少しでも明らかにするために調査を進めつつあった(第1図)。時を同じくして国学院大学助手池田栄史氏は、天草の古墳について基礎資料の収集に努められその成果を発表されてきた。又、熊本大学学生松尾法博、古城史雄の両氏は昭和56年度熊本大学法文学部史学科卒業論文として天草の古墳を研究テーマとし未調査古墳の石室実測図を作製され、「肥後天草の古墳文化」をまとめられた。

今回、各位のご協力により貴重な資料を提供いただき、本渡市に存在する古墳の現状報告を行うものである。今後、未調査の古墳についても基礎資料の収集に努め、将来は詳細な発掘調査を行う必要が生ずると思う。尚、本書に記載した古墳の調査者は次の通りである。報告は調査者が行い、一部平田が加筆・訂正・補充し編集したものである。

注1) 浜田耕作，下林素夫，本多次郎，田辺哲夫，坂本経堯，坂本経昌，三島格，乙益重隆，熊本大学文学部考古学研究室等の各位による調査。

注2) 『河浦町郷土史』5. 1981 「天草における横穴式石室の一例」『肥後考古』2. 1982。

大松道古墳・金左衛門鬼塚古墳・鬼の鼻古墳・観音向山1号墳

• 調査員

松尾法博（熊本大学法文学部史学科）

古城史雄（ ” ）

• 調査補助員

入江久成 川野 優 小栗一郎 渡辺千恵 明瀬慎吾 内山省吾 池田伸二

（以上熊本大学学生）

• 調査協力

大松道古墳—————地主 有江輝広 管理者 有江輝広

金左衛門鬼塚古墳—————地主 大塚俊光 管理者 大塚俊光

鬼の鼻古墳—————地主 桑野 清 管理者 桑野 清

観音向山1号墳—————地主 桑野新作 管理者 桑野新作

本渡市教育委員会

須森古墳

• 調査責任者

浦上恒雄（本渡市教育長）

• 調査員

赤石良一（本渡市教育委員会社会教育課，文化係長）

平田豊弘（本渡市立歴史民俗資料館，学芸員）

• 調査補助員

松尾法博 古城史雄 河野法子 池田伸二（以上熊本大学学生）

谷 保秀（天草農業高等学校生徒） 坂口隆生 草積 久（以上本渡市役所土木課）

• 調査指導・助言

江本 直（熊本県教育庁文化課，学芸員） 池田栄史（国学院大学大学院生）

• 調査協力

須森古墳—————地主 小島てる子 管理者 小島てる子

江浦三弘 金子浩三 石井正克 荒木隆正 大塚丞治 吉田徳昭（以上下浦中学校生徒）

楠浦新田古墳

• 調査員

池田栄史（国学院大学大学院生）

• 調査協力

楠浦新田古墳—————地主 宮崎毅文 管理者 鬼塚義武

田代磨紀子（本渡中学校教諭） 今江 誠（国学院大学学生） 本渡市教育委員会

第2章 大松道古墳

1. 位置と環境（第1図）

大松道古墳は本渡市志柿町字大松道4384-2番地に位置する。古墳は海に接して連なる出入りの激しい丘陵の先端に所在するが、西側の谷間を小川規模の大松道川が流れ島原湾にそそいでいる。現在、その谷間は近世以降の干拓により水田となっているが、往年は小入江であったと思われる。雑木林で形成される丘陵の標高10m程の所に古墳は位置するが眼下には有明海が広がり島原半島を遠望できる。石室は古くから開口していたらしく地元の人の伝えるところによればこれを御塚（鬼塚）と呼び、寛永14年（1637年）の天草・島原の乱のとき、妊婦を避難させていたという。

2. 古墳の現状（図版1）

大松道古墳が立地する丘陵は北側を国道324号線改修工事、東側を宅地造成、南・西側を開墾とその周囲を著しく削平されている。特に西側傾面は採土を受けており羨道部の石材が散布している。墳立の封土は石室積石をかりうじて蔽う程度に残るのみであり、現状で直径約6m、高さ約3mのいびつな円墳状を呈する。おそらく本来は直径約10m前後の円墳であったと思われる。

3. 石室の構造（第3図）

石室主体部は南西に開口する西袖型横穴式石室である。羨道部側は、著しく削平を受け、羨道部入口側の天井石が斜めにおちこんでいる。

玄室は、ほぼ方形を呈し、基底部で右壁長223cm・左壁長215cm、幅は奥壁部で228cm・羨道側で198cmを測る。^(注1)床面は、埋土のため床面施設、床面レベルは不明であるが床面レベルは、旧状とさほど大差はないようである。天井石までの高さは現状で241cmを測る。玄室基部は、巨大な板状石4枚を“コ”の字形に組み、腰石としている。尚、右壁は大小2枚の腰石を使用しており、この2枚の腰石はうまくかみあっておらず、奥壁側の腰石が羨道側の腰石の厚さ分（16cm程）だけ、横広くなっている。各腰石の高さは、様々であるが、いずれも上端面は平坦ではなく、かなりの厚みをもっている。また奥壁及び右壁の腰石は、かなり内傾している。上部は、ブロック状の石を腰石のやや奥まった所より、持ち送り式に積んで天井を架し、奥壁と倒壁の両側に架けわたす。又、奥壁では、現床面より約165cmの所から左右に梁状に架けわたした石棚が設けられている。石棚は先端に行くに従いやや下傾する。尚、石棚の上と下とでは、石の積み方は上部がやや小振の石となるが、さほどの変化はない。天井は、円形に近い六角形を呈し、直径1m程である。天井の中心は、やや玄室の西北寄りになる。

羨道部は、板状石各1枚を左右袖石として配置しており、又、袖石の上に楣石がのせられ、さらにその上に天井石を架す。羨門部の幅は、約40cmを測る。羨道は、先に述べたように天井石が倒れこみかなりの量の埋土がある。確認できる範囲では、袖石より長さ約140cm・幅約130cm・高さ約

1 mを測る。本来の床面レベルは、ほぼ玄室と同じレベルと推察される。左壁では2枚の腰石を配し、その上に2段程ブロック状の石積み天井を架している。

石室石材の大部分は、砂岩である。

4. 遺物（第2図・図版2）

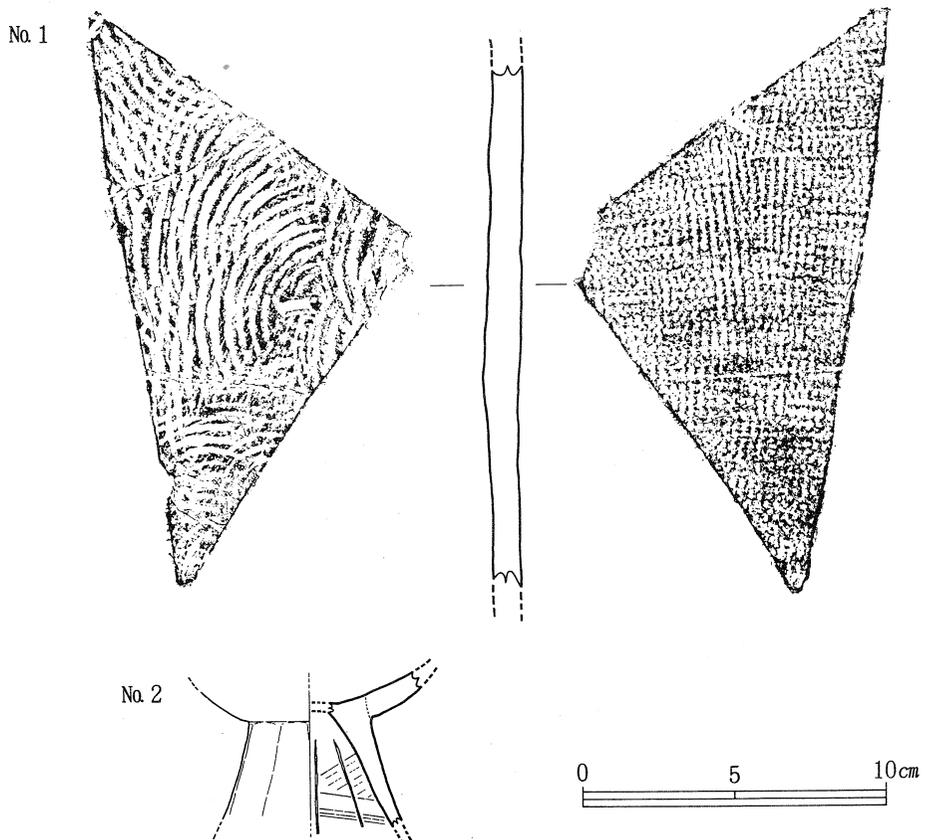
現在羨道部入口附近は、著しく削平を受け急斜面となる。その斜面中腹（羨道より約2 m程いった所）より須恵器片と土師器片各1点を表面採集した。

一須恵器—No. 1

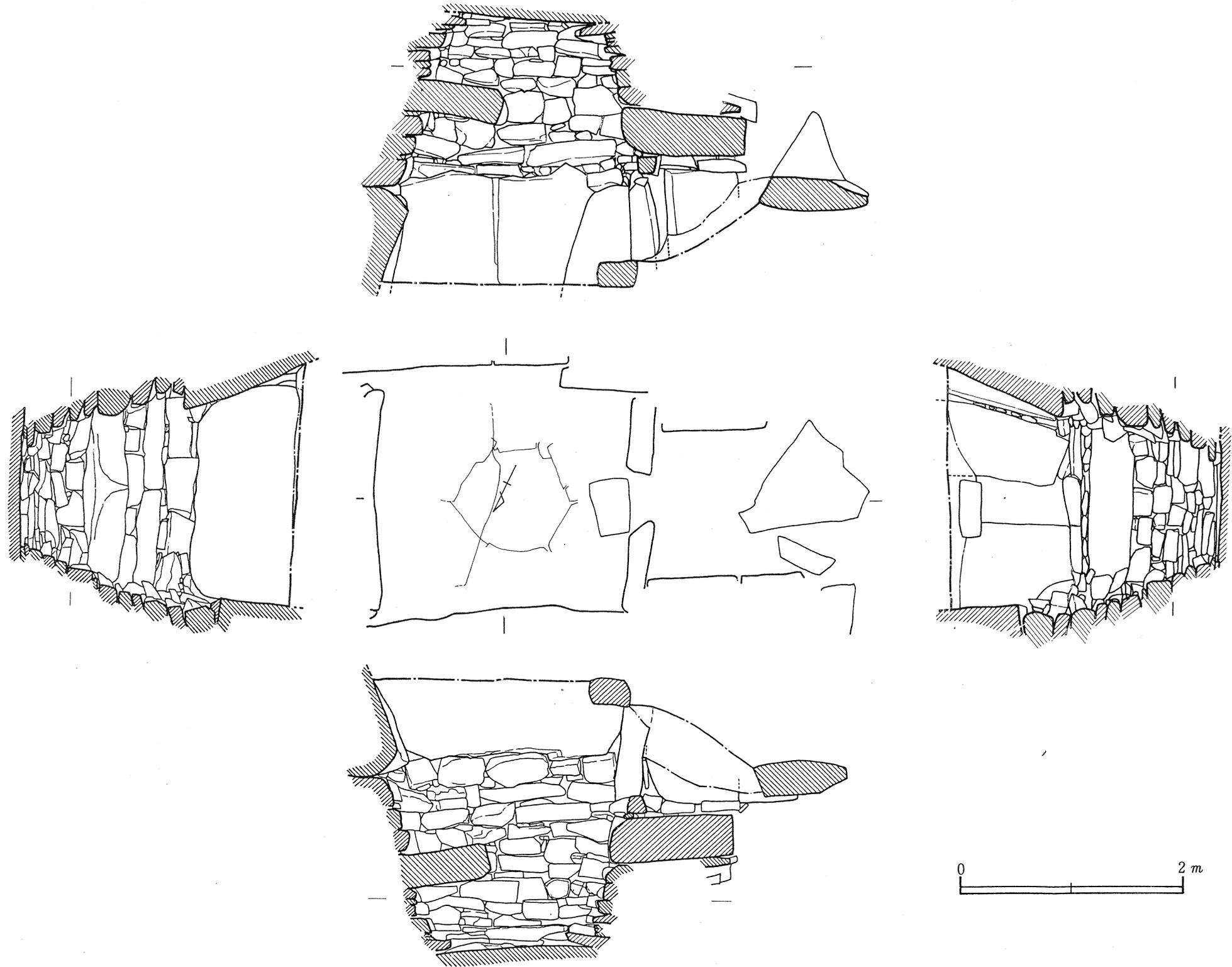
須恵器は大甕の破片で胎土は緻密である。外面には格子目叩き、内面は同心円叩きがみられる。焼きはやや甘く、色調は内外面共に暗灰色である。

一土師器—No. 2

土師器は、高杯の破片で、坏部は丸味をもち立ちあがり、脚部は裾部に向かい直線的に開く。胎土は緻密で、脚部は外面は縦方向のヘラ削り、内面は横方向のヘラ削りを施す。又、内面には縦に2本のヘラ傷がみられる。坏部は磨滅がひどく調整は不明である。焼きは良く、色調は赤褐色である。6世紀代でも、それほど新しいものではないと思われる



第2図 大松道古墳表面採集遺物実測図



第3図 大松道古墳石室実測図

5. まとめ

古墳封土は、羨道側が著しく削平を受けている。おそらくは、直径10m前後の円墳であったと思われる。

玄室はやや歪であるが、本来方形プランを意図していたものであろう。又、天井部を穹隆形に積みあげる。所謂肥後型石室の系譜を引くものである。尚、右側及び奥側の腰石の内傾は決めるには欠けるが、当時からのものと考えられる。

次に本墳のもつ特色の一つに、石棚があげられる。天草地方では唯一のものであり、熊本県下でも、石棚を有する古墳は現在周知されているもので七基を数えるのみである。本墳と植木町石川山^(注2)三号墳を除けば、いずれも奥壁腰石直上から石棚を突出させている。これに対し本墳の場合、腰石^(注3)の上に3段程石材を積んだ後に石棚を設けている。又、かなり高い位置に設けている。

最後に本墳の築造年代であるが、確実な出土遺物がなく、決めるにかけるとは今回採集した遺物も本墳の年代を知る一つの手懸りとはなりえよう。ほぼ6世紀半ば頃の築造と思われる。

注1) 実測図玄室内に、鬮石状の石があるが、これは旧状を保っているものではないと考えられる。

注2) 南関町八角目一号墳・植木町石川山三号墳・御船町今城大塚古墳・不知火町桂原古墳・川添鬼塚古墳・竜北町大野窟古墳と本墳の七基である。

注3) 石川山三号墳の場合、腰石の上に2～3段程の積み石をしているが、小さめの石で、腰石上端面を平坦にするためのものと考えられ、大松道古墳に比べ低い位置から石棚を設けている。

参考文献3

注 羨道側から奥壁に向かい右、左壁とする。他の三基についても同様である。

第3章 金左衛門鬼塚古墳

1. 位置と環境（第1図・図版9）

金左衛門鬼塚古墳は本渡市下浦町字金左衛門山 9593-12番地に位置する。古墳は下浦内海に突出した半島の中程の狭い入江奥に所在するが、急傾斜の立陵が海に接して連なり出入りの複雑な海岸線となっている。現在、入江の多くは近世以降の干拓により水田、あるいは改修により自然の漁港として小型漁船が停泊しているが、波おだやかな内海は往年の景観を推察することができる。丘陵は海に面したわずかな広さが耕地として使用されており他は雑木林で形成される。標高12m程の所に古墳は位置するが眼下には下浦内海をはさみ対岸の楠浦町南古郷の各古墳と呼応するようである。石室は地元の人々の伝えるところによれば古くから開口していたらしく、又、近年の造成で奥壁も崩壊している。

2. 古墳の現状（図版3・4）

金左衛門鬼塚古墳が立地する丘陵は開墾により耕地化されており、古墳封土も著しく削平を受けている。特に墳丘東側の奥壁部と天井部は欠損しており、墳丘の封土は側壁と羨道部を蔽う程度に残るのみである。玄室の欠損に比べ羨道部はかろうじてその構造を保っており、おそらく本来は直径約10m前後の円墳であったと考えられる。

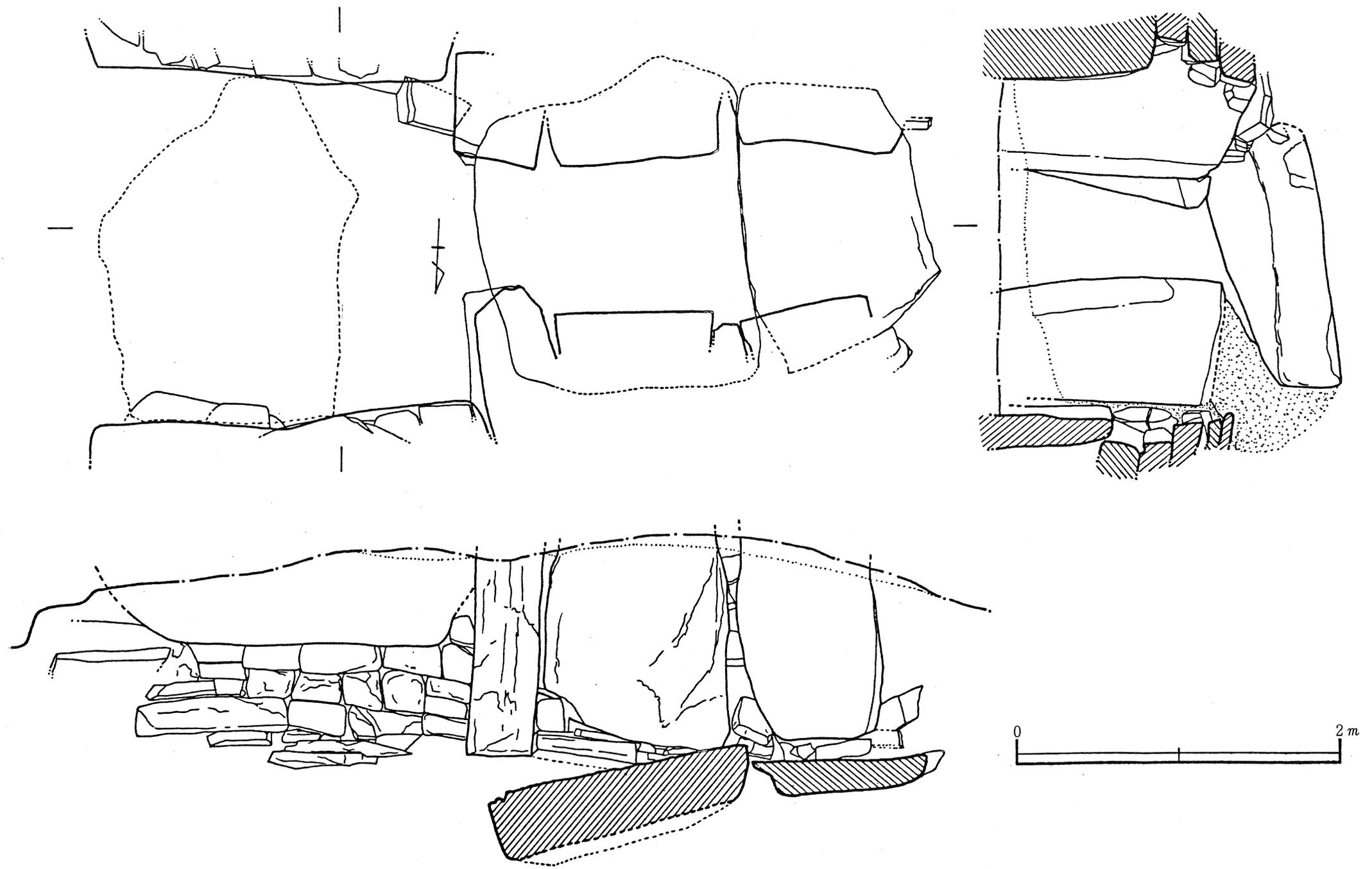
3. 石室の構造（第4図）

石室主体部は、西に開口する両袖型横穴式石室である。天井部と奥壁部は欠損し、奥壁と考えられる巨石が玄室内に倒れこんでいる。

玄室は、奥壁を欠損するため正確なプランは不明であるが、基底部で右腰石長2.2m、左腰石長2.4m、幅は奥壁側で2.2m、羨道側で2.2mを測る。ほぼ方形のプランである。床面は巨石が倒れこみ、又、かなりの埋土があるため床面施設、床面レベルは不明である。玄室基部は、本来は巨大な板状石3枚でコの字形に組んでいたものであろう。各腰石の高さは、右腰石で90cm、左腰石はそれより30cm程低い。厚さは右で30cm以上、左は18cmを測る。上端面は面取りされていないが実測した4基のうちでは最も平坦である。上部はブロック状の石材を持ち送り式に積む。特に玄室中央部では、右壁は腰石の壁面からやや奥まった位置から、左壁は腰石の背後から石材を積んでいることが観察される。現状高135cm測る。

羨道部は、方柱状の石各1枚を左右袖石として配置している。羨道の幅は約75cmを測る。羨道の長さは、袖石から2.4m、幅は約90cm、高さは最高部位で1.4mで、ほぼ玄室の現状の高さと同じである。基部に左右各2枚の巨石を配し、上部はその背後から2～3段ブロック状の石を積み、天井部には巨石を2枚架す。しかし、上部の積石は下部の腰石が内傾しているため、巨石の上にあった積石がずれ落ちたものとも考えられる。又、上部の積み石は玄室に比べ粗雑である。床面は中央部が一番低く、この附近がほぼ旧状の床面に近いものと考えられ、玄室もほぼこのレベルと同じと思われる。現在の玄室の最も低い部位よりさらに5～10cm程低くなるものであろう。

石室に用いられた石材の大部分は砂岩である。



第4図 金左衛門鬼塚古墳石室実測図

4. 遺物

現在まで確認されていない。

5. まとめ

墳丘は流失してしまい不明だが、円墳となるものだろう。

玄室は、ほぼ方形のプランを呈し、上部を持ち送り式に積むことにより、天井部を穹隆状に築くものと推定され、肥後型石室の系譜を引くものであろう。しかしながら、本墳及び大松道古墳・鬼の鼻古墳は壁面上部の積み石を、腰石のやや奥まった所より積みはじめるという点で、他地域の肥後型石室との間に相違がみられる。尚、本墳は実測した他の三基の古墳に比べ、腰石・上部積み石は最も整っており、積み方も整然としている。

次に、羨道部であるが、大松道・鬼の鼻両古墳に比べ、羨道は細くて長い。

最後に本古墳の年代であるが、出土遺物等が不明であり、決め手に欠けるが6世紀後半代位の時期を考えている。

第4章 鬼の鼻古墳

1. 位置と環境（第1図，図版5）

鬼の鼻古墳は本渡市楠浦町字南古郷 4885 番地に位置する。古墳は下浦内海に突出する丘陵の北側傾面の先端に所在し，この地区を一般に立浦と呼んでいる。丘陵の北には近世以降の干拓によってつくられた立浦新田が，東には下浦内海をはさみ対岸の下浦町の須森古墳，湯貫新田古墳，金左衛門鬼塚古墳が望まれる。南には丘陵の屋根をはさみ南古郷古墳，観音向山古墳が位置し，西には険しい山が連なっている。天草中央衛生施設本渡清掃工場横の杉林の中，標高10m程の所に北に開口する古墳であるが，八代海から本渡瀬戸を回り有明海へ向かう船舶を眼下に見下ろす格好となる。

2. 古墳の現状（図版6）

鬼の鼻古墳が立地する丘陵は，開墾によって耕地化され現在は杉林となっている。古墳封土は，そのほとんどが削平され墳丘はなく，床面からの石室積石が古墳の存在を伝えるにすぎない。

3. 石室の構造（第5図）

石室主体部は，北に開口する両袖型横穴式石室である。墳丘の大半が削りとられており，腰石及び右壁の積み石を残すのみとなっている。石材のいくつかは石室内におちこんでいる。

玄室は長方形に近いプランを呈す。基底部で右壁長^(注)2.35 m，左壁長 2.5 m，幅は，奥壁側で1.55 m，羨道側で 2.1 mを測る。羨道側にむかいやや“八”の字形開く，特に右壁の開きが大である。床面は石材の落下と埋土のため床面施設及び床面レベルは不明である。現状で，最高位の積み石までの高さ 225 cmを測る。玄室基部は，巨大な板状石四枚(左壁は二枚)を“コ”の字形にすえ腰石としていいる。各腰石とも上端面は平坦ではない。また，高さは様々である。なお，左壁の二枚の腰石はうまくかみあっていない。上部はブロック状の石を腰石のやや奥まった所より弱く持ち送り式に積み，奥壁と側壁の両側にかけてわたす。

羨道部は，巨大な板状石各一枚を左右袖石として配置する。羨門幅約75 cmを測る。羨道は，長さ約 165 cm，幅約 260 cmの天井石がおちこみ，また埋土の量も多いため，左右に各1個の巨石を確認できるのみである。その巨石の配置より推察すると，石室の入口方向に向かい“八”の字状に開くものである。現状で，長さは袖石から約70 cm，幅は最高位で約 150 cmを測る。床面は玄室と同レベルと思われる。

石室に用いられた石材の大部分は砂岩である。

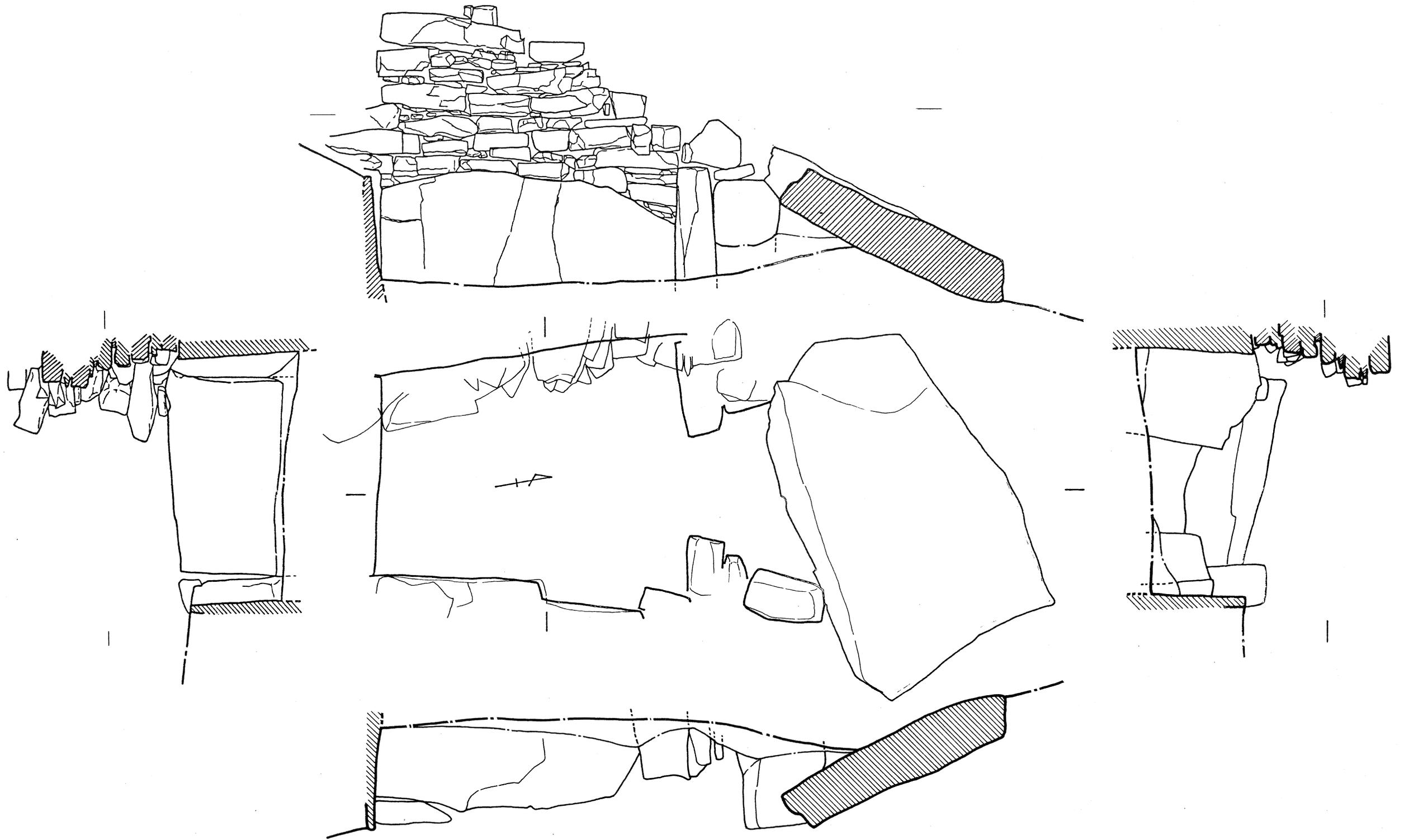
4. 遺物

西側のマウンドの境で須恵器の小破片1点を表採したが，古墳と結びつくものではないと思われる。

5. まとめ

墳丘は流出してしまい現時点では不明であるが，円墳であると思われる。玄室は，羨道に向かい“八”の字形に開く長方形プランを呈す。この地域でもやや特異なものである。しかし，積み石を持ち送り式に積むことより，天井部は穹隆状に築くものと思われる。本墳の年代については，出土遺物等確認されておらず不明であるが，六世紀後半代の築造ではなかろうか。

注 実測時の基準線は石室主軸と一致していなかったため，羨門幅の中間点と奥壁幅の中間点を結んだ線を主軸とし修正した計測値である。



第5図 鬼の鼻古墳石室実測図

0 2 m

第5章 観音向山1号墳

1. 位置と環境（第1図、図版5）

観音向山1号墳は本渡市楠浦町字南古郷4898番地に位置する。古墳は下浦内海に突出する丘陵の東に開く入江中程の傾面中腹に所在するが、この地区を一般に観音と呼んでいる。丘陵の北には尾根をはさみ南古郷古墳・鬼の鼻古墳が位置し、西には険しい山が連なっている。東には下浦内海をはさみ対岸の下浦町の各古墳が望まれ、西東には新和町檜の浦箱式石棺群が位置し八代海へと通じ、南は丘陵を隔て新和町となる。古墳の位置する入江傾面は、本来、南側に1基、西側に1基の計2基が存在したが、西側の古墳についてはみかん畑としての開墾のため消滅しており、南側の古墳が標高25m程の所に現存している。（南側の古墳を1号墳、西側の古墳を2号墳とする）

2. 古墳の現状（図版7）

観音向山1号墳が立地する丘陵は、開墾によって耕地化され現在はみかん畑となっている。古墳封土は、そのほとんどが削平され墳丘はなく、床面からの石室積石が古墳の存在を伝える。2号墳については、その存在を調査したがすでに消滅しているものと考えられる。

3. 石室の構造（第7図）

石室主体部は、南に開口する横穴式石室である。墳丘は大半が削平されている。天井部・両側壁の積石の大部分及び羨道部を欠損する。

南東側に袖石と思われる石材があり、これを袖石とみなすなら、^(注) 玄室の法量は、右壁長約2.1m、左壁長約2m、幅は奥壁側で約1.7m、羨道側で約1.6mを測る長方形プランで、石室中央幅がわずかにすぼまる。

床面はかなりの土砂が堆積し、天井部までの高さは、現状で75cmを測る。玄室基部は、本来は巨大な板状石で“コ”の字形に組んでいたと推定されるが、埋土のため現在確認できるのは、奥壁と左側壁の奥側部分のみであり、奥壁では、腰石の上端約30cmが露出しているにすぎない。上部はブロック状の石を5段程積みあげる。右奥隅には抹角状の石を配す。しかし持ち送りはほとんどない。天井には、幅2m程の巨石を架す。

現在、奥壁側の一枚のみ残存しているが、本来は二枚ないしは三枚架していたと考えられる。

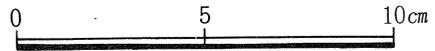
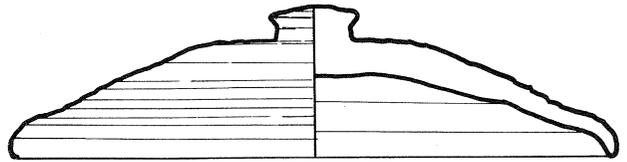
羨道部については一切不明であるが、南東部の立石が袖石だとすると、かなり羨門幅が広いことになる。

石室に用いられた石材の大部分は砂岩である。

4. 遺物(第6図, 図版8)

松本健郎氏により, 羨道より3~4m
くらい前方の畑で須恵器片が表面採集さ
れている。

「坏蓋で, 七世紀前半でも中葉に近い
時期であろう。」とのご教示を賜わった。



第6図 観音向山1号墳表面採集遺物

5. まとめ

墳丘は流出してしまい不明であるが, 円墳と考えられる。玄室は長方形プランを呈す。実測した他の三基に比べると小型で, 天井高もそれほど高くないものと考えられる。持ち送りもほとんど行わず, 巨石を天井に架すもので, 肥後型石室の範疇にはいるものではない。

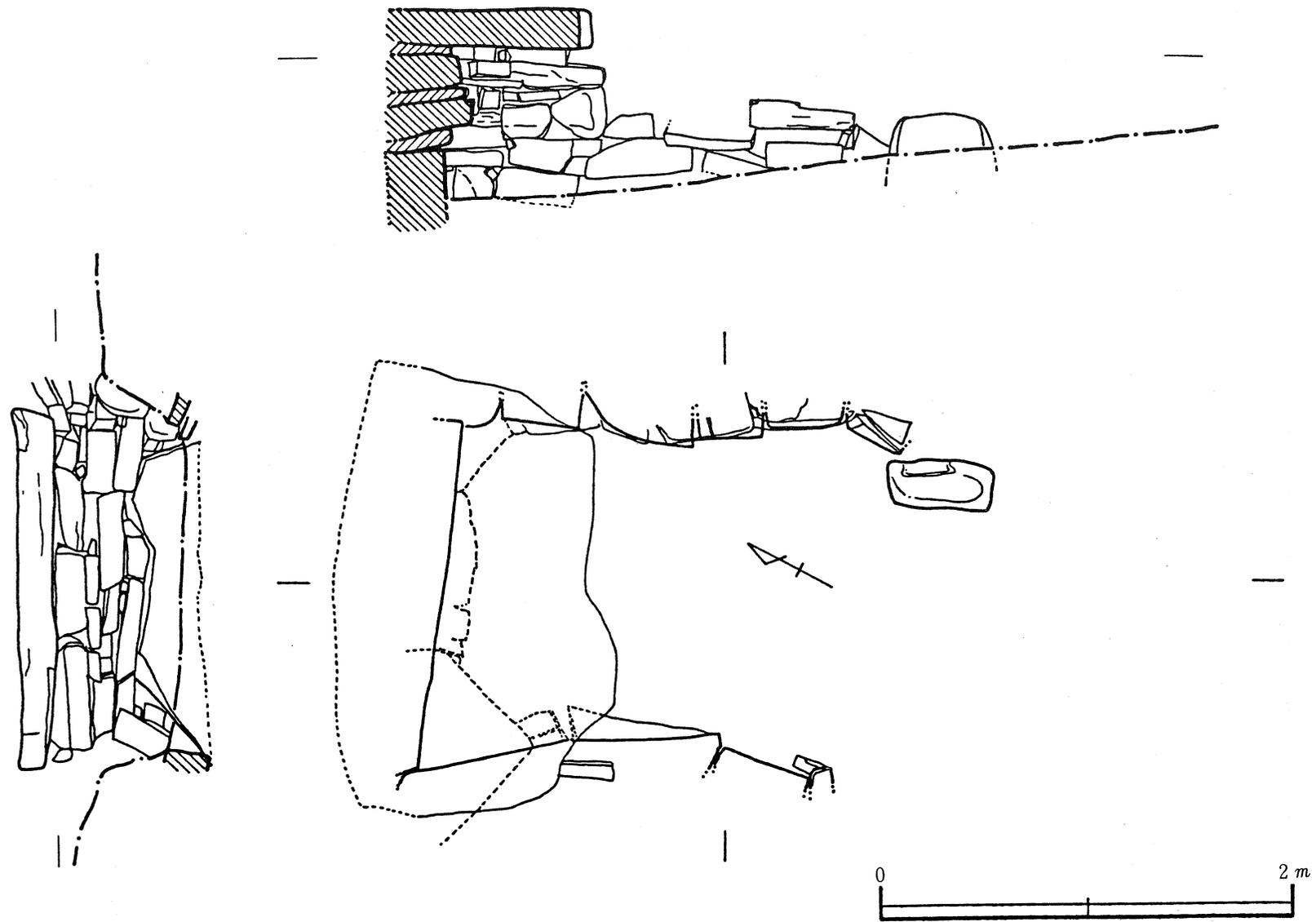
年代については, 確実な出土遺物がなく決めてに欠けるが, 石室の構造, 表面採集された遺物を考慮に入れるなら, 六世紀代後半から七世紀代にかけて, 継続して営まれたものと考えられよう。実測した他の三基の古墳より後出するものと思われる。

注 実測時の基準線は, 石室主軸と一致していないと思われる。今回, 奥壁の腰石を基準線の横軸にとり, 修正した計測値である。

本文の執筆に当たり, 松本健郎, 高木恭二, 木下洋介, 安達武敏, 平田豊弘各氏には数多くのご教示を賜わった。記して謝意を表す。(古城 記)

参考文献

- (1) 坂本経堯・経昌『天草の古代』 1971 熊本
- (2) 池田栄史 「天草における横穴式石室の一例」『肥後考古』第2号 1982・9 熊本
- (3) 田辺哲夫 他 「石川山古墳群発掘調査報告」『熊本県文化財調査報告 第9集』
熊本県教育委員会 1968



第7図 観音向山1号墳石室実測図

第6章 須森古墳

1. 位置と環境 (第1図, 図版9)

須森古墳は本渡市下浦町字出崎 2440 番地に位置する。古墳は下浦内海に突出する岬の東側先端の丘陵に所在するが、本来は出入りの複雑な入江や隣接する小島によってなっていたと思われる。海岸線は近世以降の干拓や改修により大きく変化し、丘陵間の谷間は水田となっているが、雑木林の繁る丘陵をたどると往年を推察できる。標高12m程の所に古墳は位置するが、北・東に内海をはさみ下浦町の各地区が、南には下浦町戸の崎・新和町が望まれ、八代海が展けている。西には下浦内海を隔てて楠浦町や新和町の対岸が見渡せる。石室は古くから開口していたらしく伝承によればこの古墳を鬼塚と呼び、平家の落武者蔵人行綱がここに隠れ住んだという。

2. 古墳の現状 (第8, 9, 10, 11, 12図, 図版10)

須森古墳が立地する丘陵は開墾によって耕地化されており、特に墳丘南西側の羨道部が削平を受けている。墳丘の封土は石室積石をかるうじて蔽う程度に残るのみであり、すでに天井石が姿をあらわにしている。古墳は、現状で直径約7m、高さ約3mの円墳状を呈する。おそらく本来は直径10m前後の円墳であったと考えられる。墳丘基部、玄室内床面の確認を行いたかったが、調査日数等の関係で十分な観察ができなかった。



第8図 須森古墳周辺地形図

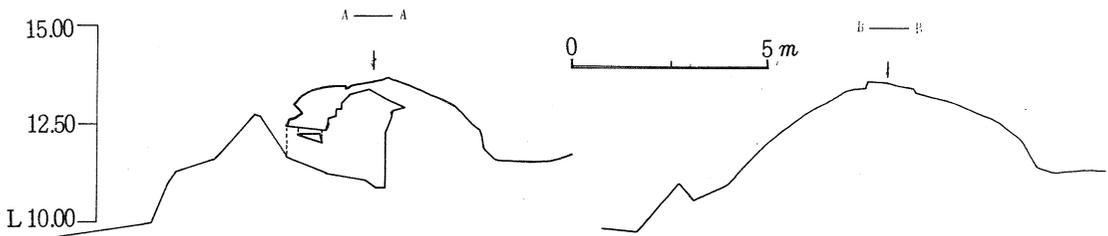
3. 石室の構造（第13図）

石室主体部は南西に開口する単室の横穴式石室であるが、羨道前部の一部が破壊され石材が散在している。

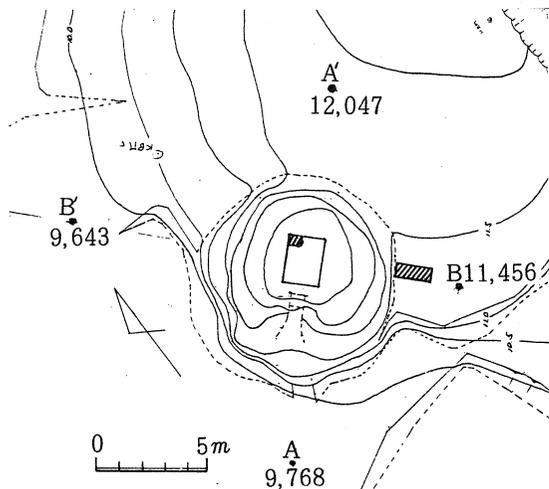
玄室は長方形を呈し、幅 150 cm、奥壁に向かい奥行右壁で 190 cm、左壁で 195 cm、高さ 220 cm を測る。玄室基部は巨大な板状の一枚石を“コ”字形に組み腰壁石として立て巡らしているが、左右の腰壁石とも中央付近で割れており、特に左壁は大きくふくらみをもっている。腰壁石の高さは様々でありかなりの厚みを持っているが、左石の腰壁石は内傾している。上部は、板状石・塊石を小口積みの手法で穹隆形に持ち送りながら積み上げ、その上に天井石を架している。

羨道部は方柱状の板石各一枚を左右袖石として配置しており、袖石の上の方柱状の楣石が載せられ、さらにその上に羨道部の天井石を架す。羨門部の幅は袖石床面で 55 cm を測る。なお、羨道部は右側に一枚の腰壁石を残して他は全て抜かれており、多量の墳丘封土が堆積し、本来の形状については明らかでない。現在、玄室奥壁から羨道部までの長さは約 3 m であり、観察の上からも羨道部がさらに若干前方へ延びると考えられる。前方部に数個の板石やブロック状の石が散在しているが、羨道部の石材として使用されたものであろう。

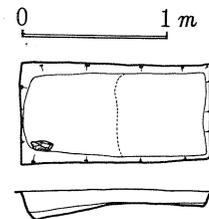
石室床面は全面に亘って攪乱されており、特に奥壁北側においては掘り込みがあり、この掘り込み部を清掃したが、小板石が散乱し近代の炭化物が出土した。また、石室の耐久力が極めて弱く作業を行うことが危険となったため、床面施設が存在したかどうかについての観察はできていない。



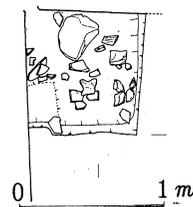
第9図 須森古墳墳丘断面図



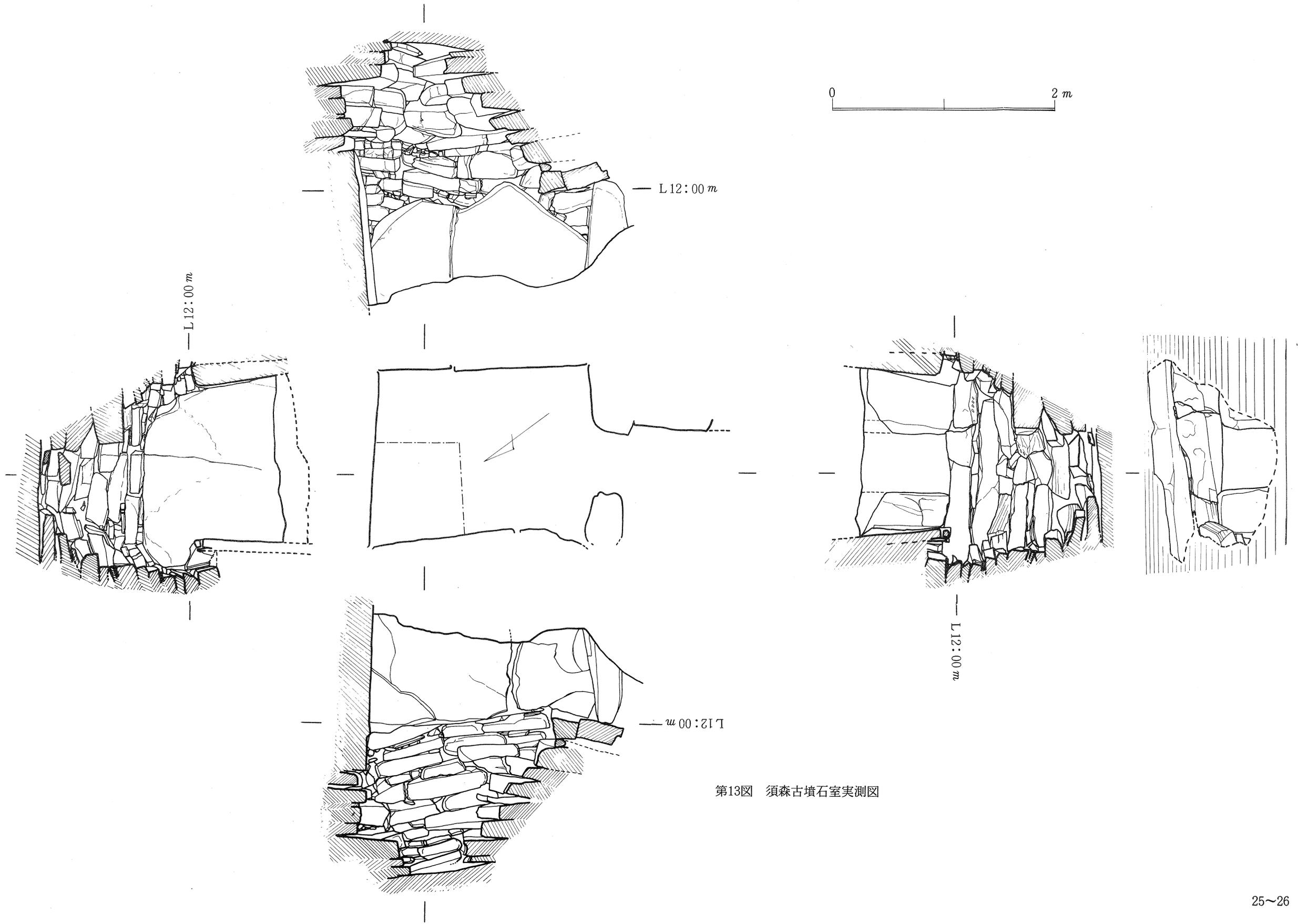
第10図 須森古墳試掘構配置図



第11図 須森古墳墳丘基部試掘構実測図



第12図 須森古墳玄室内奥壁北部試掘構実測図



第13図 須森古墳石室実測図

4. 遺物(第14図, 図版11)

破壊された羨道部の西側部分で、墳丘につきささった状態で須恵器を表採した。他に池田栄史氏(図版8~13)も須恵器を表採している。これらの時期は六世紀後半から七世紀前半になるものと思われる。

【瓶】

- No.1 破片として一部分だけを採集したため器型は不明であるが瓶と思われる。胎土・焼成とも良好。色調は灰色。器表面は格子目がほどこされ、すり消しカキ目調整がほどこされている。内面にはタタキ目が残る。

【壺】

- No.2 胎土はやや小砂粒が混入しているものの焼成とも良好。色調は、表面が自然釉が全面にかかっているため灰白色。内面は灰色である。器表面は格子目叩きが丁寧にほどこされている。内面には同心円叩きが残る。
- No.3 2破片が上下に重なっているところを採集。胎土は密で、焼成とも良好。色調は灰色。器表面は格子目叩き、内面には同心円叩きが残る。
- No.4 胎土・焼成とも良好。色調は灰色。器表面に格子目叩きとカキ目調整の跡が残る。内面には同心円叩きが残る。
- No.5 胎土・焼成とも良好。色調は灰色。器表面に格子目叩き、内面には同心円叩きが残る。
- No.6 墳丘後方部より採集した唯一の資料である。胎土は小砂粒が混入しているが密で、焼成は極めて良好である。色調は黒灰色。器表面には格子目とカキ目叩きとカキ目調整の跡が残る。内面には同心円叩きが残る。
- No.7 胎土・焼成とも良好。色調は白灰色。器表面はカキ目調整がほどこされている。内面にもヘラによる調整がほどこされている。
- No.8 壺の口縁部で、胎土・焼成とも良好である。色調は灰色。器表面はロクロを使用してハケ目調整を行っている。内面は、指による形整のあと軽くハケ目調整をほどこしている。

【坏】

- No.9 坏身の口縁部で胎土は緻密、焼成は良好である。色調は暗青灰色。器表面はハケによる横ナデ調整が一方方向から行われている。内面も同じ。
- No.10 坏身の底部で胎土は緻密、焼成は良好である。色調は暗青灰色。器表面(底部)はヘラ削りがほどこされている。内面は、ハケによる一定方向への横ナデと、一部中心部へ向けてのナデがある。No.9と同一個体の可能性もある。

【高坏】

- No.11 高木脚部で胎土は緻密、焼成は極めて良好である。色調は表面が暗黒色、内面が灰色。器表面は大きなハケ目がほどこされ、整然とした文様になっている。内面はハケ目調整がほどこしてあり、脚部の奥は逆方向に2~3回の調整を行っている。全面(器表面)に自然釉がかかり、高さ8cm前後の一段透しがはいる。

【器台】

- No.12 器型は不明であるが器台と思われる。胎土・焼成とも良好。色調は灰色で、一部表面に自然釉がかかり黒灰色。器表面・内面ともハケ目調整をほどこしている。内面にはY字ヘラ記号と思われるものがきざまれている。

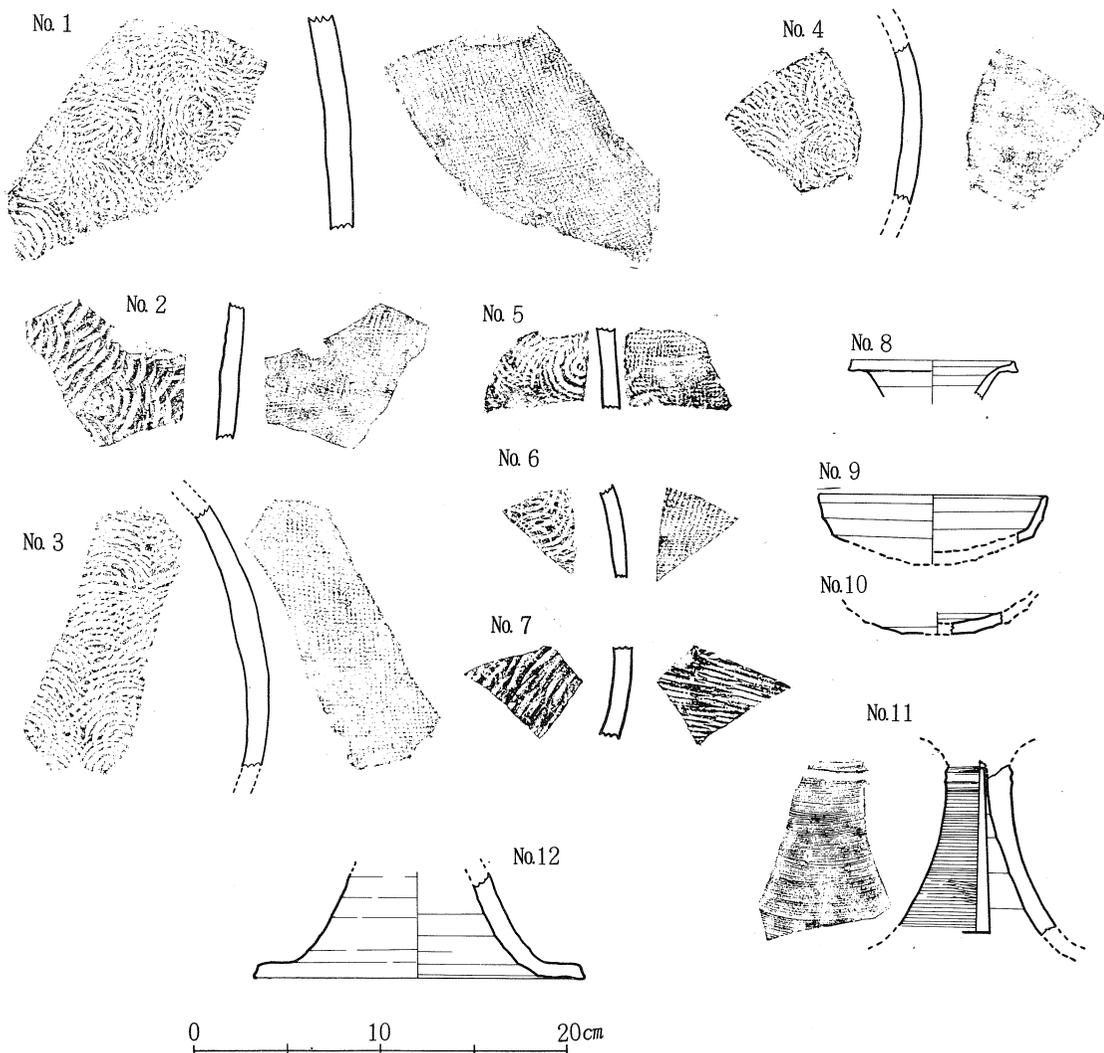
5. まとめ

須森古墳は、天草に現存する古墳の中でも石室遺存状態が良好な古墳の一つである。しかしなが

ら、一石室として見れば長年に亘る雨水や樹根による侵食、墳丘封土の削平などが進行し、石材のひび割れ、壁面の胎み出しなど随所に見られる。また、戦後浮浪者が居住し石室内の煮炊きにも及んだため、石室天井部では媒が附着している。石室床面も全面に亘って攪乱されたと思われ、石障などの床面施設が存在したかどうかは現状では観察できない。

遺物については、表面採集であるが数点の須恵器を収集することができた。推測される器形や整形技法の上から六世紀後半代頃に編年されるものと思われ、本墳の築造もこの頃と考えられる。今後、羨道部を中心とした詳細な調査を行うことにより、尚一層正確な規模・遺物などの資料が得られると思う。

注1 坂本経堯・経昌『天草の古代』 1971によると丹を塗った赤い石室と報告されているが、丹(朱)であるのか不明である。



第14図 須森古墳表面採集遺物実測図

第7章 楠浦新田古墳

1. 位置と環境（第1図，図版12）

楠浦新田古墳は本渡市楠浦字鬼塚又 9381 番地に位置する。楠浦地区は下島における合併以前の旧町村の一つであり、本渡瀬戸に注ぐ楠浦川の流域一帯を占める。楠浦川は流域面積が狭いにもかかわらず、多くの支流を持ち、平地に面した丘陵部は櫛歯状に谷が入り組んでいる。また河口近くでは海の干満潮時の水位変化によって干潟が形成され、近世以降になってそこが徐々に干拓され、現在では水田地帯となっている。楠浦新田古墳はこの干潟を干拓して作られた水田（新田）に突出した丘陵上に位置しており、おそらくかつては、ここまで海水が湾入していたものであろう。古墳は丘陵の先端に築かれ、水田面との比高差は約 5 m である。古墳の位置する丘陵からは背面にそびえる天草下島の山々と前面に広がる水田、さらにそこから本渡瀬戸を経て天草上島の山並みを望むことができる。石室は古くから開口していたらしく、地元の人々の間では「鬼塚」と呼ばれ、楠浦鬼塚姓の源流をなすものと考えられている。

文献の上からは昭和 7 年刊行の「天草の史蹟」に写真と簡単な紹介がなされている他、昭和 10 年に発行された「天草郡古墳地名表」にその記載が見え、昭和 45 年発行の「天草の古代」にも簡単な紹介がなされている。しかし、これまでに実測図作製をはじめ正式な調査は全く行われておらず、今回の実測調査となったのである。

2. 古墳の現状（図版13）

楠浦新田古墳が立地する丘陵は開墾によって耕地化されており、古墳封土も著しく削平を受けている。したがって、墳丘の盛土は石室積石をかるうじて蔽う程度に残るのみであり、現状で直径約 7 m、高さ約 3 m の円墳状を呈する。おそらく本来は直径約 10 m 前後の円墳であったと考えられる。

3. 石室の構造（第16図）

石室主体部は南に開口する単室の横穴式石室であるが、耕作によって羨道前部の一部が破壊されている。

玄室は略方形を呈し、幅 2.3 m、奥行東側壁で 2.5 m、西側壁で 2.7 m、高さ約 2.4 m を測る。各壁の基部には一枚石を腰壁石として立て巡らし、そこから板状石・塊石を横手積みあるいは小口積みの手法で穹隆形に持ち送りながら積み上げ、その上に天井石を架している。

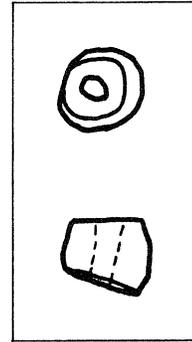
羨道部は方柱状の石材各一枚を東西袖石として配置しており、羨門部の幅は楣石直下で約 30 cm、床面上で約 50 cm を測る。楣石は大形の板状一枚石であり、それがそのまま羨道部の天井石となる。羨道部は現存部分で幅 1.5 m、長さ 1.4 m であり、東西両側壁とも基部に大型の板状石各二枚ずつを据え、その上に板石や塊石を二、三段積み上げた後、天井石を架している。なお、羨道部東側壁出入口近くでは腰壁石を残して積石が全部抜かれており、本来の形状については明らかでない。し

かし、玄室奥壁から羨道部までの現存長は 4.4 m であり、現状観察の上からも羨道部がさらに前方へ延びるとは考えられない。したがって、石室の規模は古墳築造時と比べて、それほど変形されていないものと思われる。

石室床面については全面に亘って攪乱されたと見られ、石障などの床面施設が存在したのかどうかは現状では観察できない。

4. 遺物 (第15図, 図版14)

楠浦新田古墳の遺物については確認されているものがほとんどなく、本渡歴史民俗資料館にガラス製小玉1個が保管されているのみである。ガラス製小玉は濃紺色を呈する小形品で直径6mm, 厚さ最大部で5mm, 最小部で3mm, 孔径は楕円形ながらほぼ1.5mmを測る。また、この他、古墳周辺の耕作地では現在でも須恵器の小破片を採取することができる。これらは図化できる程の大きさではないが、推測される器形や整形技法の上から六世紀後半代頃に編年されるものと思われ、楠浦新田古墳の年代を知る一つの手懸りとなる。



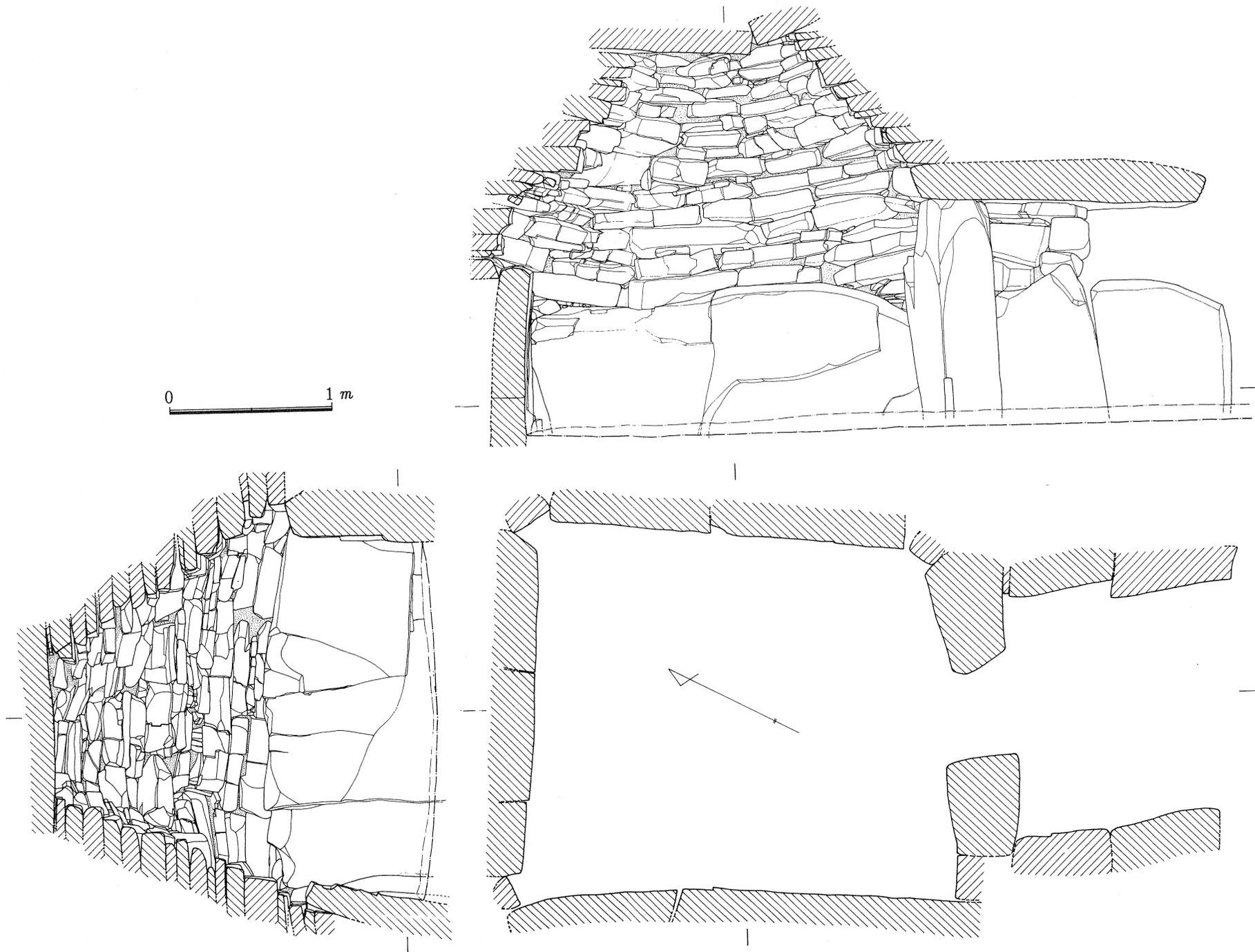
第15図 楠浦新田古墳表面
採集遺物実測図(2倍大)

5. まとめ

楠浦新田古墳は、天草に現存する古墳の中でも石室遺存状態が良好な古墳の一つである。また、石室の構造、遺物からその造営年代は6世紀後半と思われるが、ここで石室構造技法上から注目すべき点について注記したい。

楠浦新田古墳石室は石室平面観が略方形を呈し、天井部を穹隆形に積み上げて構築する、いわゆる「肥後型」横穴式石室の一つである。また横穴式石室の中でも特に壁面基部に腰壁石を据え、その上に塊石を積み上げて石室を構築するという时期的に新しい技法を用いた石室でもある。しかし、楠浦新田古墳における腰壁石の用い方は「肥後型」横穴式石室において通常に見られる技法とはやや様相を異にしている。

腰壁石を用いる石室では、一般に腰壁石上の積石と腰壁石との面を揃えて積み上げるのが通例である。それに対して楠浦新田古墳の場合は、玄室の四隅において腰壁石上に石材を構築しているものの、両側壁及び奥壁中央部では積み方を異にし、壁材を腰壁石の上縁部裏側から積み上げている。(第3図1)。したがって、楠浦新田古墳の腰壁石は石室の四隅では腰壁石として機能するが、各壁の中央部では腰壁石としての意味をなさない。これと同様な腰壁石の構築例は、他に本渡市下浦須森古墳石室、同市志柿大松道古墳石室などで観察され、地域的にも集中する傾向がみられる。さらに、この地域の周辺では上記の石室と非常に類似した腰壁石と上部の積石との関係がみられる数基の古墳が存在する。その例として、本渡市下浦金左衛門鬼塚古墳石室や同市楠浦立浦鬼の鼻古墳石室があげられる。



第16図 楠浦新田古墳石室実測図

第8章 本渡市の古墳文化

1

日本列島の大半の地域には大小様々な古墳が分布する。古墳はほぼ西暦4世紀から7世紀代までの期間を中心に築造されたものと考えられ、その時期を古墳時代と呼んでいる。古墳の築造はまず畿内地方に起こり、その後全国各地へ伝播したと一般的に考えられている。しかしながら、同じ古墳と呼ばれても、全国各地に分布する古墳は、それぞれ規模や内容・数量・年代等に多くの差異がみられる。したがって、古墳時代の研究には畿内地方を中心とする概説的な様相とともに、各地域単位の変遷を把握することが必要である。そこで、ここでは本渡市を中心とした古墳時代の様相について本書に掲載した古墳を基に概観してみたい。

なお、古墳時代にかかわらず地域史の研究では、現在の行政区画に固執しては実態を見失いがちであるため、必要に応じて天草全体に係わって述べていく。

2

本渡市を含めた天草の古墳についての学術的な調査は、大正年間京都帝国大学文学部考古学研究室によって実施された松島町阿村下大戸鼻古墳群、大矢野町維和島広浦古墳の調査を嚆矢とする^(注1)。京都帝国大学による調査は九州地方に多く分布する装飾古墳調査の一環として行われたもので、『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第1・3冊に収められている。この調査は当時の人々に大きな影響を与えたものらしく、その後、昭和7年には大戸鼻古墳群や楠浦新田古墳などの写真と簡単な紹介を載せた『天草の史蹟』が刊行され^(注2)、同9年には下林繁夫氏による大矢野町中村長砂連古墳の調査も実施された^(注3)。翌昭和10年には本多次郎氏によって古墳・箱式石棺約百基余りを網羅した「天草郡古墳地名表」が発表されている^(注4)。

戦後においては、戦前の皇国史観からの解放に伴って考古学的研究が大いに活発化し、天草においても古墳についての数々の調査・研究がなされた。昭和30年には田辺哲夫氏らを中心として大矢野町維和島における古墳の分布調査が行われ^(注5)、42年にはホテル建設に伴って地下式板石積石室で知られる本渡市亀川妻ノ鼻墳墓群が緊急調査された^(注13)。45年には坂本経堯氏を中心とする御所浦町の遺跡分布調査が行われ^(注6)、翌46年には坂本氏自身の天草における長年に亘る調査研究を集大成した『天草の古代』が刊行された^(注7)。『天草の古代』には遺跡地名表も掲載されており、天草に現存する古墳の数を180基とされている。また、昭和43年三島格氏を中心に行われた大矢野町後庄屋田成合津2号墳は、昭和50年『熊本史学』50号誌上に報告がなされている^(注8)。昭和55・56年度には熊本大学考古学研究室により、かつて昭和31年に確認されていた松島町永浦島カミノハナ古墳群の調査が行われ新知見を得た^(注9)。また、昭和54年には河浦町今富鬼塚古墳が調査され、その成果は56年『河浦町郷土史』第5輯として刊行されている^(注10)。

天草における古墳時代研究は五和町二江沖ノ原遺跡や苓北町福岡出来浜遺跡のような製塩遺跡をのぞけば、古墳の調査が行われたのみで集落遺跡の調査はほとんど実施されていない。それは、これまでに大規模な開発行為がそれほど行われていないとともに、無関心さの由に見過ごしてきたことが多いと考えられる。古墳時代の所産と考えられる土器片の散布地は天草各地に数多く知られており、今後調査の機会も増すものと思われる。

また、古墳についても単に調査し、報告を行うという段階から、これまでの成果を総合し、天草の古墳文化の特質を検討する段階にまで到達しており、本書もそうした活動の一翼をなすものである。

3

天草の古墳地名表については前段で述べた諸賢の研究に詳しい。その中で本渡市域に分布する古墳及び古墳時代墳墓についてあげれば、第1図のものが知られる。これらはその構造の違いから、

- ① 箱式石棺墓
- ② 地下式板石積石室墓
- ③ 横穴式石室墳
- ④ 横穴墓

の四種に分類できる。

- ① 箱式石棺

箱式石棺は板状の石数枚から10数枚を組み合わせて、人体を葬るための棺状施設を造るもので、古くは縄文時代からみられる墳墓形態である。内法長150～180cm、幅40～50cm、深さ40～50cm程の大きさを一般的とする。

箱式石棺としてあげた先尾串石棺群は坂本経堯氏によって紹介されたもので、下浦の小湾の中の小島に分布する。9基からなる石棺群であり、坂本氏は「長さに比べて幅が広い。古い形態をもつ」とされている。^(注11)遺物その他が不詳なためこの年代その他については明らかでないが、天草の他地域の類例から4～5世紀頃の所産と考えられる。

- ② 地下式板石積石室墓

地下式板石積石室墓は地表下1.2～1.7mの位置を床面とし、板状石を立て巡らして、高さ50cm程の槨壁を造り、その上に小形の板状石を持ち送り式に魚鱗状に積み重ね、頂部が尖り気味の天井を構成するものである。墳丘その他の意識的に設けた地上施設が認められないのを特徴としており、乙益重隆氏は床面のつくり方によって四形式に分類されている。^(注12)それによると第一類は長楕円形、第二類は円形、第三類は長方形、第四類は方形を呈する。一般に第一・二類は北薩摩と肥後の球磨、芦北地方に多く、第三・四類は出水平野の一部と天草に分布するもの大勢を占めている。また、必ず群集墓を形成し、少なくとも数基、多い場合には百基以上が群集することもある。妻の鼻墳墓

群の地下式板石積石室墓は、昭和42年7月ホテルの建設工事の際発見されたもので、緊急調査によって35基が確認された。35基のうち25基が第三類、6基が第四類で、その他に小塊石を楕円形にならべた異例の石囲1基、床からいきなり塊石を平積みにし平面が長楕円形の堅穴式石室を思わせるもの1基、形式不明のもの1基、墳墓ではなかったものが1基あった。各石室ともすべて合葬がみられ、少ないものでも2・3体、多いものでは12体を納めた例も知られている。副葬品の銅鏃や銅釧、土師器などから、これらの石室群の営まれた期間は5世紀末から6世紀前半の頃と考えられている。^(注13)この地下式板石積石室墓は先の乙益氏によって隼人部族の墳墓であることが論証されており、妻の鼻墳墓群の存在は本渡市域においてもかつて隼人部族が居住していたことを示すものである。

③ 横穴式石室墳

横穴式石室は5世紀前半以後全国に広まった石室形態で、遺体を納める石室に出入口を設けることから成立した。幾人かの研究者によってその石室形態の分類と編年が行われているが、九州地方に分布するものは大別して2種のものがある。一つは「玄室の平面が長方形を呈し、側壁を割石や栗石で小口に積み上げ、その上に天井石を架し、四隅はおのおの直角に築く」ものであり、もう一つは「玄室の平面が方形を呈し、側壁を創石で小口に積み、天井は穹隆形を呈し、石室の四隅は隅丸に築く」ものである。^(注14)乙益重隆氏は「前者は北部九州を中心に発達し、全国的な横穴式石室墳の主流となったが、後者は主として中九州の肥後地方を中心に局部的な発展を遂げたにすぎない」として、前者を『北部九州型』、後者を『肥後型』石室とされた。^(注15)

この『北部九州型』・『肥後型』二種の石室形態は天草の古墳にも影響を及ぼしているが、天草の場合『北部九州在』の石室は少なく大半が『肥後型』石室の範疇に含まれる。本書に掲載した志柿大松道古墳、金左衛門鬼塚古墳、鬼の鼻古墳、須森古墳、楠浦新田古墳はその代表的なものである。また実測図を掲載しなかった湯貫新田古墳も天井石が崩落する程に壊れているが、現状確認の上では『肥後型』の範疇に含まれると考えられる。^(注16)

ただ、実測図を掲載した古墳の中で観音向山古墳のみは石室平面観が長方形で、天井の持ち送りも少なく、構造的に『肥後型』石室とは異なっている。あるいは『北部九州型』の石室構造に近いとも考えられるが、石室の大半が埋没している上に耕作による側壁のせり出しもあり、後世積み直された可能性も考えられる。詳細は今後の検討に待ちたい。

なお、この他地名表に挙げた南古郷古墳は文化庁発行の『熊本県遺跡地図』に記載がみられるものの現地を確認できない。同様に大矢崎古墳群も坂本経堯氏の『天草の古代』にかつて存在したという記載がみられるのみである。また、先明瀬鬼塚古墳は地元で「鬼塚」と呼称している他、以前、鶴田倉造氏が同地で須恵器高杯脚部片及び須恵器片各1片を採取されていることから古墳と考えられるが確認できない。^(注17)

これらの横穴式石室の築造年代については、須森古墳や楠浦新田古墳などで確認された須恵器の編年観から6世紀後半を中心として、その前後の時期に築造されたものと考えられる。^(注18)

④ 横 穴

横穴は凝灰岩層やローム層の露頭に横穴式石室に似せた墓室を掘削し墳墓とするもので、古墳時代中期以降築造された。全国津々浦々に分布するものではなく、局部的に偏在する。九州では肥後地方と筑前地方の一部に主として分布する。本渡市茂木根江古平横穴群は肥後・天草地方の横穴としては最西端に位置する。同横穴群は東西各2基、計4基からなり、東に位置するものは後世防空壕として改変されている。西側の2基は奥行18m程の単室で、平面形はきんちゃく形の平床、天井はドーム形を呈する。天草切支丹館に茂木根明瀬横穴出土の須恵器坏身3個と坏蓋5個が展示されており、それらは7世紀前半代頃に位置付けられるものと考えられる。

以上、本渡市域に分布する古墳及び古墳時代墳墓について述べてきたが、これによって本渡市域ではまず古墳時代の墳墓として箱式石棺や地下式板石積石室が採用され、6世紀後半から横穴式石室を主体部とする、いわゆる古墳が築造されはじめ、7世紀代に入り横穴も出現することが知られる。

4

さて、前段にて本渡市域に分布する古墳及び古墳時代墳墓の種類について述べてきたが、前述したように古墳時代の趨勢は畿内地方を中心にその展開が考えられている。例えば、九州において古墳が造られはじめるのは、畿内地方からの影響を受けて4世紀中葉のこととされている。九州で最初に古墳が出現するのは、瀬戸内海の西端に位置する現在の宇佐市から行橋市周辺と考えられ、^(注19)肥後地方でも4世紀後半代には宇土半島基部地域にスリバチ山古墳・追の上古墳・弁天山古墳などの前方後円墳が出現する。^(注20)肥後地方における古墳文化はこの宇土半島基部地域と菊池川流域を中心に考えられている。天草地方には現在のところ4世紀に遡る古墳の存在は知られていないが、5世紀代に築造されたものとして、大矢野町登立成合津古墳（竪穴式石室墳）、同町長砂連古墳（横穴式石室・装飾古墳）、同町維和島広浦古墳（箱式石棺・装飾古墳）、松島町阿村下大戸鼻北古墳（横穴式石室・装飾古墳）、同南古墳（箱式石棺・装飾古墳）などがあげられる。これらの古墳は、いずれも先に肥後地方でも逸早く古墳が出現するとして宇土半島基部地域からそれ程遠くない。大矢野島を中心とした地域に分布している。大矢野島周辺は宇土半島と天草上島の間中に位置し、有明海と不知火海を結ぶ海上交通上の要所に位置する。ここに天草の他地域に先立って古墳が築造されたことは、古墳の伝播を考える上で十分重視しなければならない。また、それらの古墳のほとんどが装飾古墳であることも注目すべき特徴である。

6世紀後半代にはいり、本渡市域を含めた天草のほとんどの地域に古墳が伝播する。本渡市域における古墳の出現もこうした古墳伝播に係る一連の展開の中で考えねばならないが、特に隼人部族の墳墓と考えられる地下式板石積石室墓が妻ノ鼻墳墓群にみられる如く、6世紀前半をもって消滅し、古墳がそれに取って代わって出現することは象徴的である。このことは、6世紀後半以降、本

渡市域に居住していた隼人部族と畿内政権あるいは古墳を築造するという墓制を受け入れた九州本土の畿内政権と結んだ居住部族との間に政治的な変動が生じたことを示すものであろう。

5

さて、古墳出現に係わる問題とともにここでは本渡市域に分布する古墳の特徴についても述べておきたい。

本渡市域のみならず天草に分布する古墳に、前方後円墳がないことは既に述べた。墳丘が現存せず未確認のものもあるが、ほとんどの古墳は、内部主体の箱式石棺や横穴式石室をおおう程度の円墳である。墳丘規模も10m前後のものが多く、本渡市域に分布する古墳もすべて10m前後の円墳である。ちなみに、天草諸島に分布する円墳の中で最大規模のものは松島町阿村下大戸鼻北古墳で、それでも20m前後に過ぎない。この規模は他地域においては群集墳の大きさと何ら変わらない。

次に、先に墳墓の分類に際して略述したが、本渡市域に分布する古墳の主体部は『肥後型』横穴式石室の範疇に含まれることも注目される。このことは、本渡市域の古墳が肥後地方からの伝播によって成立したことを示すものである。しかし、これらの古墳石室を観察すれば、『肥後型』横穴式石室の構築技法からやや変化した石積み技法が用いられていることにも気付かれる。この点についてはかつて管見を述べたこと(注21)もあるので簡単にまとめると、本渡市域に分布する横穴式石室は腰壁石とその上部積石の積み方に特徴がある。腰壁石を用いる石室技法は比較的新しい時期のものであり、一般に腰壁石上の積石と腰壁石との面を揃えて積み上げるのを通例とする。これに対して、本渡市域に分布する古墳の場合は玄室の四隅では腰壁石上に石材を構築するものの、両側壁及び奥壁中央部では積み方を異にし、壁材を腰壁石の上縁部裏側や腰壁石の壁面からやや奥まった位置から積み上げるのを特徴とする。横穴式石室に腰壁石を採用した場合、腰壁石と腰壁石とが直交する四隅は直角に近い角度を持つのは当然のことである。したがって、方形の平面観と穹隆形天井を特徴とする『肥後型』横穴式石室に腰壁石を採用するには、直角の四隅を腰壁石上の積石で解消し、さらに穹隆形天井部へと積み上げていかねばならない。このためには腰壁石上の積石を方形に配置された腰壁石の壁面を揃えて積み上げるよりも、当初からなるべく隅丸方形に近い形にして積み始めた方が合理的であり、実際に腰壁石を用いる『肥後型』横穴式石室では、このために多くの努力が払われている。

しかしながら、本渡市域に分布する古墳の場合、当初から腰壁石の配置や厚さに拘泥することなく、腰壁石上の積石をまず隅丸方形に積み上げることが優先されている。このため腰壁石の厚さが薄い石室の場合、四隅では腰壁石として機能するものの、各壁の中央部では腰壁石としての意味をなさず、腰壁石の裏側から石材が積み上げられる結果となっている。そこには一般的な『肥後型』横穴式石室に採用された腰壁石技法では説明しえない『天草型』ともいべき独特の技法がみられるのである。

筆者は、この腰壁石技法が大矢野町長砂連古墳や松島町阿村下大戸鼻北古墳のような『肥後型石障系横穴式石室』^(注22)からの発展形態ではないかと勘案しているが、このように共通する石室構築技法を持つ古墳が一地域内に分布することは非常に注目される。現在のところ、この石室構築技法が確認できる古墳に楠浦新田古墳・志柿大松道古墳・下浦須森古墳・立浦鬼の鼻古墳・金左衛門鬼塚古墳がある。また、現在腰壁石のみが残存し上部の積石が不明なものの、有明町須子鬼塚古墳・竜ヶ岳町大道鬼の釜古墳^(注23)なども同様の構造であった可能性が考えられる。いずれにせよ、天草において一つの石室構築技法によって一つの分布地域が限定されることは、当時の社会を推測する上で大きな示唆に富んでいる。また、これらの石室構築技法をもつ古墳がほとんどの場合、一つの谷間や内湾毎に一基単位で分布することも注目される。おそらく、当時の本渡市域に居住した集団の社会構成に係わってこのような現象が表われたものと考えられるが、これらについての検討は将来の研究に待ちたい。

注

- (1) 浜田耕作他「肥後における装飾ある古墳及び横穴」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』1. 1917, 同「九州における装飾ある古墳及び横穴」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』3. 1919
- (2) 『天草の史蹟』1932 みくに社
- (3) 下林素夫「装飾文様ある長砂連古墳」『九州日日新聞』記事 1934
- (4) 本多次郎「天草古墳地名表」『天草の史蹟』1. 1935
- (5) 田辺哲夫『天草郡大矢野町維和古墳群調査概要』1955
- (6) 坂本経堯編『天草・御所浦一自然と人文一』1970
- (7) 坂本経堯・経昌『天草の古代』1971
- (8) 三島格・松本健郎他「熊本県天草郡大矢野町成合津古墳調査概報」『熊本史学』50 1975
- (9) 熊本大学文学部考古学研究室「カミノハナ古墳群」『研究室活動報告』11 1981
同「カミノハナ古墳群2」『研究室活動報告』14 1982
- (10) 池田栄史『河浦町郷土史』5 1981
- (11) 注(7)文献参照
- (12) 乙益重隆「地下式板石積石室墓の研究」『國史學』83 1971
- (13) 本渡市教育委員会編「妻ノ鼻墳墓群」『本渡市文化財調査報告』1 1982
- (14) 乙益重隆「九州」『新版考古学講座5 原史文化<下>』1970 P80-12
- (15) 注(14)文献P80-13
- (16) 注(14)文献P80-14
- (17) 文化庁『全国遺跡地図 熊本県』1981
- (18) 本渡市立歴史民俗資料館学芸員 平田豊弘氏の御教示による。
- (19) 小田富士雄「九州」『日本の考古学』IV 1966
- (20) 佐藤伸二「宇土半島をめぐる古墳文化の諸問題」『肥後考古学会誌』1 1981
- (20) 池田栄史「天草における横穴式石室の一例」『肥後考古』2 1982
- (20) 乙益重隆「石障系石室古墳の成立」『國學院大學大学院紀要』11 1980 参照
- (20) 注(7)文献参照

版 図

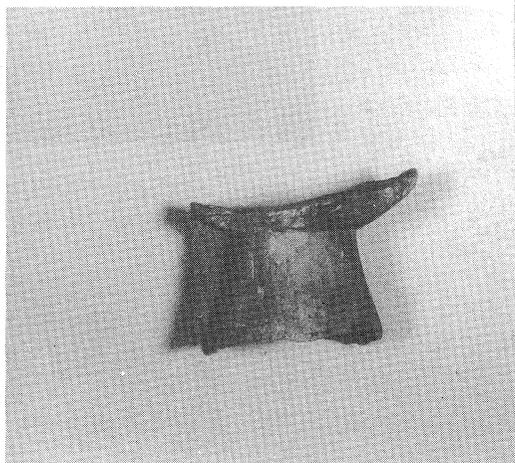


図版1 大松道古墳現状（羨道側から）

▼No. 1



▼No. 2



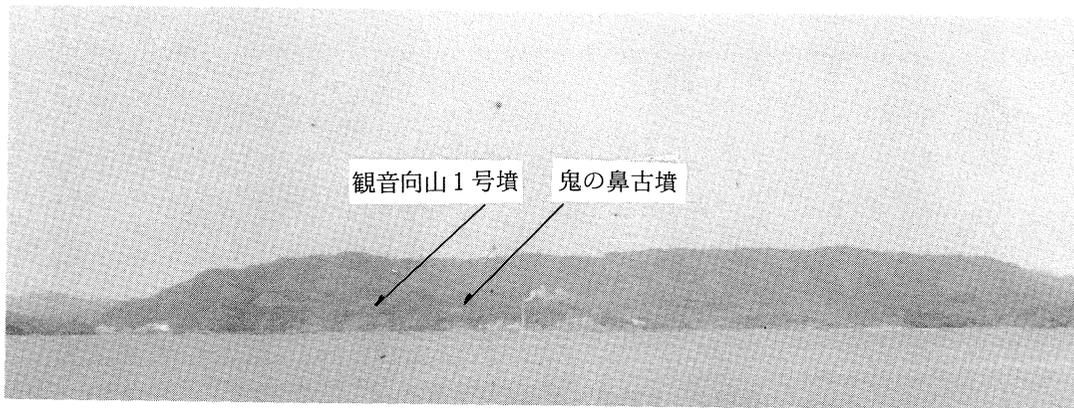
図版2 大松道古墳表面採集遺物



図版3 金左衛門鬼塚古墳現状（羨道側から）



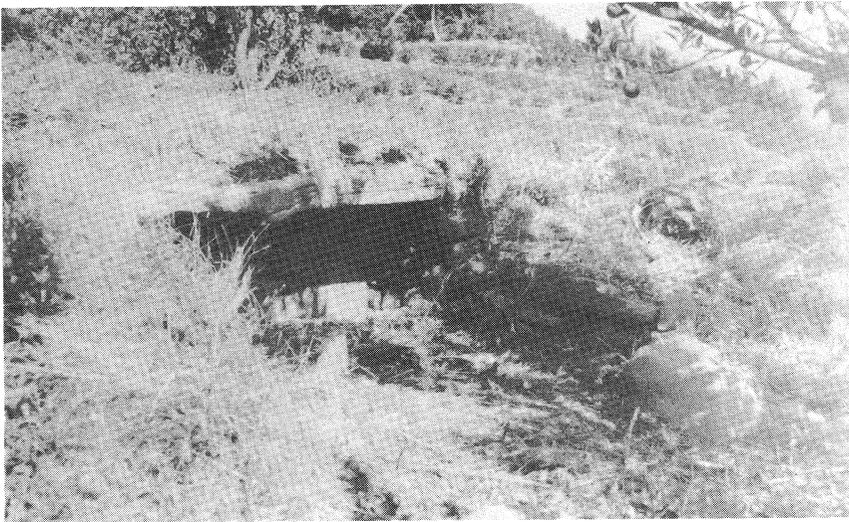
図版4 金左衛門鬼塚古墳羨道（羨道側から）▲
（玄室側から）▶



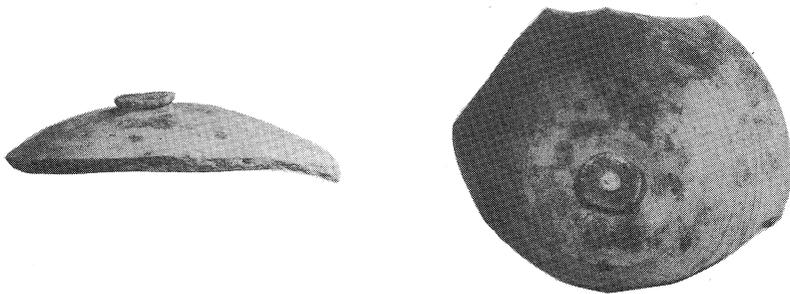
図版5 鬼の鼻古墳，観音向山1号墳遠景（対岸下浦町須森より臨む）



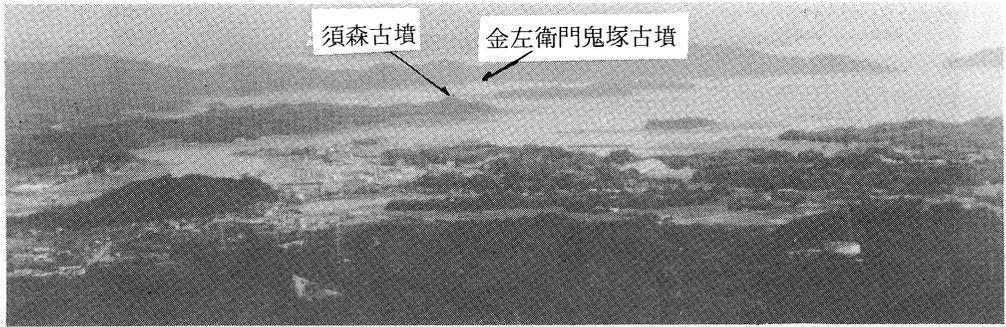
図版6 鬼の鼻古墳現状（羨道側から）



図版7 観音向山1号墳現状（羨道側から）



図版8 観音向山1号墳表面採集遺物



図版9 金左衛門鬼塚古墳，須森古墳遠景（本渡市十万山より臨む）

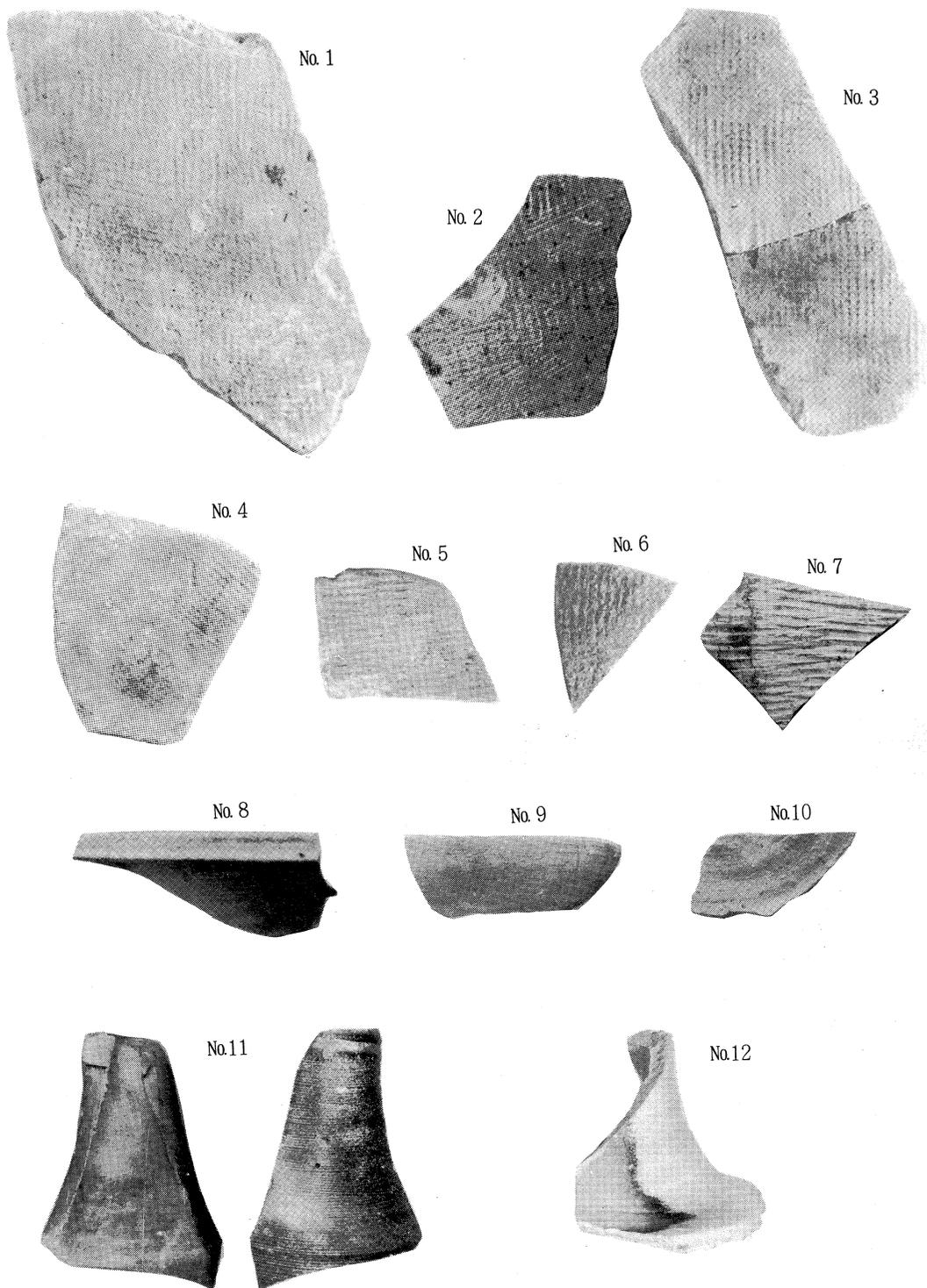


（羨道側から）▲

図版10 須森古墳現状

（後方から）▼

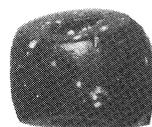




图版11 須森古墳表面採集遺物



図版12 楠浦新田古墳遠景



図版14 楠浦新田古墳
表面採集遺物
(約3倍大)



図版13 楠浦新田古墳現状（羨道側から）

贈 本渡市教育委員会

昭和五十九年八月四日

本渡市文化財調査報告 第4集

本渡市の古墳(1)

[大松道古墳 金左衛門鬼塚古墳 鬼の鼻古墳]
[観音向山1号墳 須森古墳 楠浦新田古墳]

発行日 昭和59年3月31日
発行者 本渡市教育委員会 教育長 浦上恒雄
発行所 本渡市教育委員会
〒863 熊本県本渡市東浜町8番1号
電話・本渡(09692)③1111

印刷 印刷センター
本渡市城下町3-17
電話・本渡(09692)②2857(代)

市天
立草
天
草
切
支
丹
館